

◇卷八 冬の雑歌

大宰帥大伴卿、冬日、雪を見て京を憶ふ歌一首

1639 沫雪のほどろほどろに降りしけば奈良の都し思ほゆるかも

○西本願寺本

大宰帥大伴卿冬日見雪憶京歌一首

沫雪保柿る保柿る奈良敷く平城京帥一可念可聞

【右注】

\*大宰帥大伴卿：大伴旅人がいつ大宰帥となつて九州へ下つたかは不明だが、卷三の妻を亡くしたときの歌 $\infty$ 番に「神亀五年戊辰大宰帥大伴卿思恋故人歌三首」とあること、またその当時、都から来た弔問の勅使に贈つた歌に夏の鳥ホトトギスが詠まれていることから、神亀五年(728)の春ごろには、大宰府にいたことが知れる。また、任解かれて帰京したのは天平二年(730)十二月であつたから、この歌を詠んだのは天平元年前後である。

【語釈】

\*沫雪：『倭名類聚鈔』に読み方が「阿和由岐」とあり、意味を「其弱如水沫」と説明している。『萬葉集古義』は「雪は弱くて水の沫の如く、消易きが故にいふならむ」という。泡雪の意味。平安時代以降は、その消えやすさから「淡雪」と和歌に詠まれた。

\*ほどろほどろに：「ほどろ」を繰り返した語だが、「ほどろ」の意味には諸説がある。契沖や真淵は、「まだら」(斑)の意味だとする。『萬葉集古義』は、ハラハラと降ることだという。前者は地上に降り積もつた状態であり、後者は降つてくる空中の状態をいうから、歌の情景の把握には大きな違いが生じる。今日では講談社文庫本が「まだら」とし、沢瀉注釈や新日本古典文学大系などは「ハラハラ」としている。「ほどろ」に降る沫雪を詠んだ次の例歌、

2323 我が背子を今か今かと出で見れば沫雪降り庭もほどろに

などから考えれば、地上に降り積もつた雪の状態をいうことが知れる。するとこの「も」次の「降りしけば」にかかる語句で、「降りしけば」の意味も、降り傾けばではなく、原文どおり降り敷けばの意味であろう。また、「ほどろ」は次のように夜明けを詠む歌にも使われている。

754 夜のほどろ我が出でて来れば我妹子が思へりしくし面影に見ゆ

この例から類推すれば、ほんのりと、とか、うつすらと、といった意味がふさわしい。

【総釈】

万葉に詠む「沫雪」とはどんな雪だろうか。単に消えやすいというだけでなく、細かい粟粒のような白い塊が、ふわふわと空から落ちてくるような情景を思わせる雪ではないだろうか。語釈で述べたように、「ほどもろ」は、その雪が地上にうつすらと積もった状態である。消えやすい雪だから、まだらな状態にもなるだろうが、そこに意味の中心があるわけではない。

この風景を、作者がどこから見ているかは不明だが、現代の読者は大宰府庁の庭に想像をめぐらしたり、さらに広くその周りの山野を含んだ風景に想像をめぐらして、うつすらと積もった雪の景色を思えばよい。しかしこれは望郷の歌であった。大伴旅人は、その雪景色を「奈良の都」と重ね合わせて見ているのである。彼にとつての「奈良の都」はただの平城京の風景ではなく貴族たちの社交の世界であり宮廷世界であった。遙か遠い九州の雪景色から連想されたのは、都での風流な雪の宴であっただろう。

大伴旅人の望郷歌は万葉集中に他にもある。卷三に載せる、藤の花が咲くころ大宰府の部下たちと詠み合った歌である。次は旅人のその一首。

331 我が盛りまた変若めやもほとほとに奈良の都を見ずかなりなむ

「また変若めやも」すなわち再び若返ることなどあるうはずがないと歌うとおり、旅人はもはやかなりの歳であった。大宰府から帰ったのは天平二年(730)の冬で、翌年の七月には六十七歳で死んでいる。彼はかろうじて再び奈良の都を見ることができた。

降ってもすぐ消える奈良の雪は、貴族たちにとって楽しく観賞する対象だった。沫雪の歌を詠んだときの旅人の脳裏には、都で暮らした過去の雪の日の楽しい思い出がよみがえっていたのだろう。